

都市水域の基礎的研究

その16 東京湾ウォーター・フロント開発-2

正会員 ○ *1) 高橋 信之
*2) 三浦 秀一
*3) 尾島 俊雄

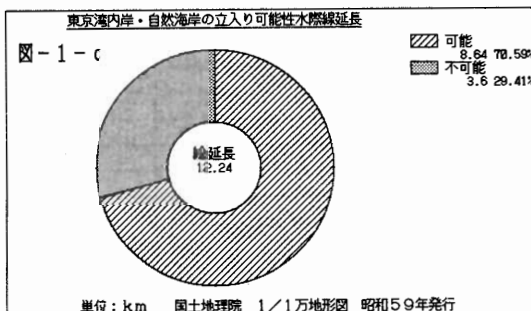
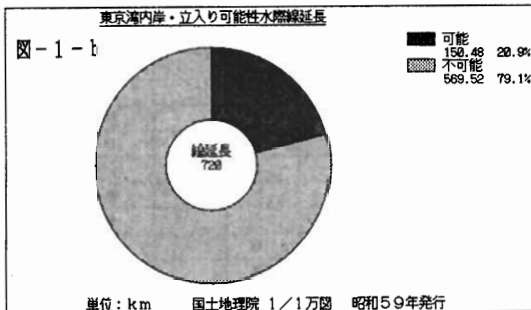
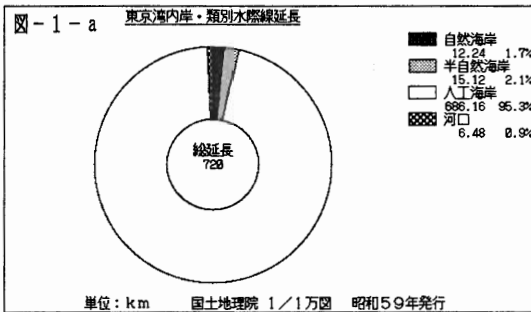
立入可能性 臨海公園 人工渚

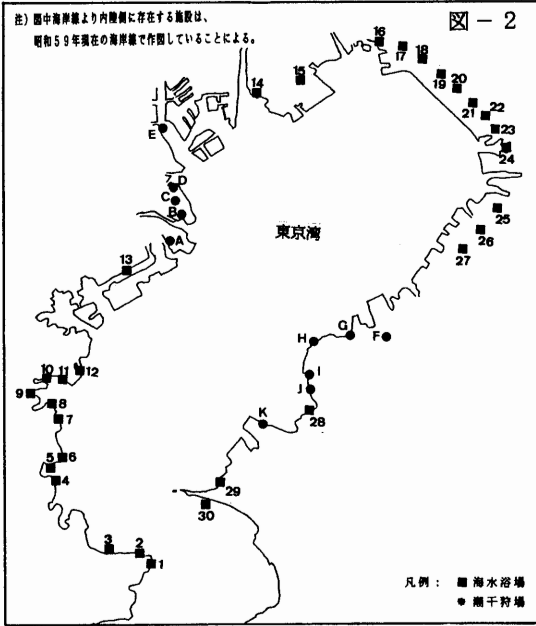
■序

戦後の高度成長に同調し、工業化による工場用地確保に向けた大規模な埋立てが行われた。結果、自然が豊かで、臨海漁業が営まれ、市民による潮干狩り等絶好の行楽地であったが、現在では殆んどその姿を止めない状況となった。過去の大自然、現在の工場群、そして次への脱皮を用意している東京湾にとって重要なことの一つに自然回復がある。前報(昭和63年一梗概)によって示したごとく、湾岸の埋立地の活用は、水際線環境の巧みな自然回復と自然維持が重要である。そのためには、かつての大自然地域であった東京湾環境の歴史的な経緯を調査すると同時に、現況の調査が必要である。

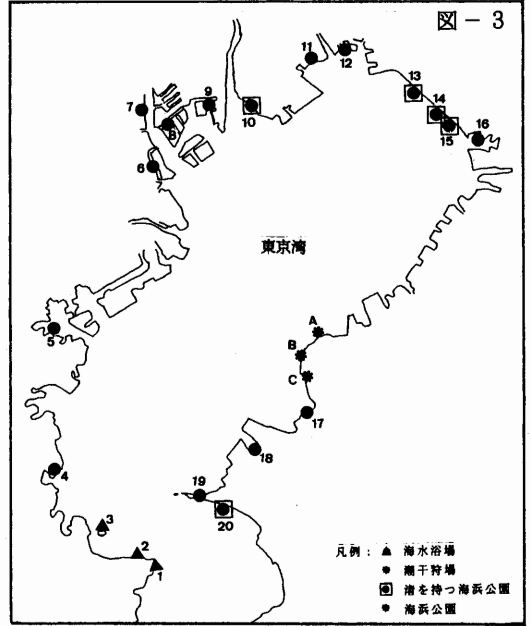
■現況における東京湾岸の自然と人工

東京湾の湾岸線延長はおおよそ720kmである。この総延長に対して図-1-aで示すように、自然海岸はお





昭和25年以前の海水浴場、潮干狩場の分布



昭和59年現在の海水浴場、潮干狩場、臨海公園の分布

よそ12.24km、1.7%のみである。又、湾岸で市民が自由に立入りできる場所は同図-bが示すようにおよそ21%である。自然海岸地域も、30%程は公的機関により閉鎖されているとか、危険であるとかの理由で立入り不可能である。半自然状態海岸は、立入り不可能地域は50%近い数字である。一方、人工海岸は企業並びに港湾施設等によって占拠されており、一般の市民が立入れる余地は少なく、僅かに2割弱である。海水浴場、潮干狩り、レジャー用地として湾岸が利用されていた昭和25年以前の状況は図-2で示す。海水浴利用可能な場所は18ヶ所、潮干狩り利用可能地は12ヶ所であった。昭和五十九年になると、海水浴場は3ヶ所、潮干狩り可能場所は3ヶ所と激減した。この間、回復と再構築を目指した公園等の施設建設がなされてきた。その結果、葛西臨海公園を始めとする渚臨海公園が5ヶ所になり、大貫海水浴場を含めると6ヶ所となる。この間の変化と現況については図-2、3及び表-1によって示される。

■結果と今後の問題

東京湾の海、或いは自然の荒廃ぶりは既に多くの論がある。しかし、その実態調査は十分でないところがある。ここではその実態の概要を調査した。東京湾の湾岸部は6つの港湾区に分割されているので、これを各々の調査フィールドとして、詳細調査を進めていくことが妥当であるとする。

*1)早稲田大学講師 工博 *2)同大学院 工修 *3)同教授 工博

No.	公園名	海水浴可	人工渚有	潮干狩可	海浜公園	自然豊富
1	観音崎海水浴場	●				
2	馬堀海岸海水浴場	●				
3	猿島海水浴場	●				
4	金沢海の公園		●			
5	山下公園				●	
6	大井埠頭中央海浜公園				●	
7	浜離宮				●	
8	お台場海浜公園				●	
9	夢の島公園				●	
10	葛西臨海公園		●			
11	新浜野鳥の楽園				●	●
12	船橋海浜公園				●	
13	幕張人工海浜		●			
14	検見川人工海浜		●			
15	稲毛人工海浜		●			
16	千葉ポートパーク				●	
17	鳥居浜海浜公園				●	
18	富津市民ふれあい公園				●	
19	富津公園		自然●			
20	大貫海水浴場	●				
A	牛込海岸			●		
B	瓜倉海岸			●		
C	久津間海岸			●		

表-1